

時事新報

時事新報

時事新報は日本國中唯一の毎日刊行新聞紙なり

第二千四百二號
明治廿二年九月四日 水曜日
舊曆己丑八月十日 (癸未)
山手前六時三十分
日中前六時三十分
入午前一時五十分
出午前一時五十分
編者 藤田鳴鶴
印刷 藤田鳴鶴
(西曆一千八百八十九年)

北海道移住

北海道は沃野千里の地なり斧斤山入らずして若木は
 新陳交代の道なきを嘆き礦脈は萬年知己を得ずして
 臥龍の三顧を待つが如し沿海漁獲の利に富んで内地は
 桑麻百穀に適し氣佳なる哉鬱々蒼々然たり富源の深く
 して遷利の多きと日本國中共に比す可きものなしと
 雖も開拓事業實施以來年を閲するも已に二十、三
 千餘萬圓を消費して起業を助け移住を勧め獎勵行き届
 かざるに非ざれども人口の増殖は僅に廿五六萬人に過
 ぎず案外なりと云ふ可きあり今假りに歐洲の西北部、
 我北海道と同緯度の處と同様の一嶋ありたらば如何、
 人の之れに赴くも蟻の梨子に集まるが如く政府の手
 にて獎勵保護する等の手段を待たず全嶋、人の黒山を
 成して物産繁殖烟突林立、大厦高層櫛比して土一升に
 金一升の盛況を呈すると云ふらん均しく是れ北海道なり
 、歐洲の近海を接すれば忽ち人の黒山を成し日本に於
 て然らざるは何ぞや畢竟我日本人の不悟也申すの外
 なければ従來歐洲各國にては蒸汽船車の便利を具へ
 て人の往來自由あるが故に八々他行外出に慣れて廣
 世界を股に掛け利の在る所を見出して之れを赴く
 あれども日本は交通開けたりと云ふも鐵道僅に一千英
 里に達したる位の事にして封建時代郷黨居居の趣は今
 尙依然たるが故に云はば遠方の事情を知らず遠方の遺
 利を見出すと能はざるものにして其有様は穴居の蟻が
 粟子の所在を知らざるを一般、之を知らざるが故に之
 れを築まざるの念も薄からざるを得ず甘を慕ふは蟻の本
 性、利に赴くは人の常情、之を遠ざけずの道は一旦誘
 ふて實物を見せ其甘利の所在を示して其嗜慾を促すの
 一方あるのみ即ち我が日本人も向て北海道移住を勧め
 んとするには唯其形勢を口にして之を耳に訴ふるのみ
 ならず其手を引て之を北海道に誘ひ甘汁芳餌を其眼に
 示して移住の念を心底に醸さしむる事肝要にして之を
 誘引するに二様の法あり一は政府より我が官私鐵道會
 社を賦して特別に所謂移住民列車を立立てし一箇月
 に凡る二三回を期して汽車交通のあらん限り北海道移
 住若くは之を檢分せんとする者を無償にて同道で
 運送する事、一は同じく政府より我が汽船會社と約
 して移住民運送の法を立て其向きの目的を以て北海道
 に赴かんとする者に限り無償乗船を許さしむる事即ち
 是れなり今實際家の眼に據るに我が鐵道會社中は盤
 費勿々事務未だ緒に就かざる向きも多く此際移住民列
 車を立立て又その向きの切符を發する等随分困難を生
 ず可きが故に當分移住民の運送は汽船に由る方便利か
 らんと云ふ其邊は實地と雖も後に譲り兎に角に無償
 の便を開きて移住の目的を以て北海道に赴かんとする
 者は勿論、或は一時その實地を見物せんとする者にて
 も汽船車中移住民の取扱を以て片道の運賃は都て政
 府の支給として其旅行を許したらば我が人民中にも
 漸く移住の念を發起し人々相促して遷々繰り出すと

も爲らんか或は永住の考なく一時見物を終り次第、
 匆匆歸郷するものもあらん即ち片道の運賃を得ながら
 移住の實効を立てざるものもあれば此人々が郷里に歸
 りて近隣合壁に所見を談じ世間も北海道の賑を増加す
 れば人耳漸く其談に熟して眼に其實地を見んと欲し
 結局世人の感服中に北海道を近寄せて行路の難を配慮
 するの情を絶つ可きのみ斯くて移住民運送費として政
 府より汽船鐵道會社に任拂ふ可きもの一人平均凡そ十
 圓と見積るも五萬人として五十萬圓、十萬人にして百
 萬圓、之を從來の殖民費に比すれば僅々の額と云はざ
 るを得ず我輩の聞く所に據るに英國にては全嶋の人口
 年々四十萬を増加するの比例にして之れと同時に貧民
 を増加するの恐れあるが故に同國の有志家中にては自
 助移住民會社なるものを設け海外へ移住せんとする人
 々には移住地の景況事情等に就き成る可き寸分の報道
 を與へ又移住費に乏しき者には其事次第若干の
 旅費資本を貸與するの都合にして昨年中の報告に據れ
 ば一名の貸與金凡そ五磅即ち我が三十三圓三十錢餘に
 當りたりと云へり英國にては内國人口の増加に迫られ
 其人民を海外殖民地或は縁もなき外國に送らんとする
 に右様の補助を與ふるに非ずや然るに我北海道移住民
 の如き日本帝國中に於ける千里の沃野を開拓して其物
 産を増殖し國家富強の源を養はんとする其使者として
 出張するものあれば官民共に之れを助けて相當の保
 護を與ふるは情理の當に然るべきものなりと云ふて可
 からん是等の方便を以て北海道移住民を増して全道の
 人烟稠密と爲り鶏鳴牛吠相接して宛然一雄鎮たるに至
 らば人民自治の基を立て壯丁を擧げて操練を敷へ一旦
 緩急全道の力を以て北門の鐵鎗を守る杯の用意もある
 べく彼の屯田兵の如きものは寧ろ其費用を見ざるも
 もならんか蓋し我が其向きの人は北海道屯田兵の制を
 稱して兵農兼備の銘譽ありと信じ追てます其制を
 擴めんとするもの如く軍規を以て農圃に及ぼし其行
 止の時間を制するは固より一利なきに非ざれども一方
 には兵を業として農事を片手間にするが故に費用固よ
 り多端として收支相償ふ可しと思はれず我國にても
 近來鐵道の開通するに隨ひ軍國運輸の便利を増し驛國
 兵を提げて我が北海道を襲はんとするなどの場合もあ
 れば豫め其兆候を察して最寄鎮營の兵を發し或は軍
 艦を差し廻はして夫れ一攻防の用心を爲すよ自然不
 手廻りの箇條を減じ結局屯田兵を待んで一時を間に合
 はする等の心配も亦かる可ければ此等の兵は先づ是れ
 までの處に差し置き寧ろ其費用等を集めて之を移住民
 獎勵法に用ひ全道人口の増加するを待ちて退て土兵を
 編制し全道の殷富繁榮に伴ふて自治自守の長計を立つ
 るも我輩の大願とする所のものなり

地方へ赴く旨電報ありたり云々と廿一日五條發の報
 ○清國通信 上海八月二十三日發
 黎公使召喚の噂 東京に駐在する清國公使黎庶昌氏は
 本國政府の召喚より多分歸國するならんと當地にて
 の噂
 曾氏吐血す 此程或る洋字新聞紙の記載する處に據れ
 ば北京政府にて目今其人ありと聞えたる若政治家の曾
 紀澤氏は王事よ心勞するたため知らざれど折々吐血す
 る事あり極めて忽かせにすべからざる一症なれば早速
 名醫を延き加養に手を盡し居る最中に或る外交官は一
 日之れを見舞ふて親しく談話する處よては左程心配に
 は及ぶまじき容體あれば速に快復するもたらんと云
 へり
 西太后電氣の利を知る 北京宮殿に電氣燈を施設する
 事は日外も一寸報じたるありしが今又聞く處に據
 れば右は海内豐澤の雨苑も分置せしめ每晚六時頃より
 火を點して七時には即ち海内等に燃移り煌々として怡
 も白晝の如く内臣一同は奇妙不思議の感想を起すも可
 笑し扱之れを取扱ふには手数難密にして既に天津より
 手慣れたる技師三四名を授任し雇外人も交代せしめ海
 軍衙門よりも委員番兵等十數名を派出したり元來太后
 は外品を採用するを嫌ひたりしが電燈の一事より俄に
 此迷霧を拂ひたる模様ありと
 支那官吏の來往 近來本埠を通過する官吏の多き中
 も重立たるは正任戸部尚書翁叔平氏は既に六十日の暇
 を賜はり南下して便宜な輕舟を備ひ蘇州より常熟へ歸
 省したり又原任江蘇巡撫黃子壽氏は南京より赴中興
 縣港即ち蘇州河の浚濬工事を見分し新任湖南巡撫鄒小
 村氏は北京より同路上海製造局總辦薛仲芳氏も出
 發して各事宜を奏聞に及ぶとのとあり
 軍艦來着 フラツル國の軍艦アルミルパロツロ號は
 去る十九日午後入港して黃浦江に碇泊せり近日中に
 又南洋を指して巡航する由
 吉日を下して出發 先頃より本埠に滞在して米國へ赴
 任すべき崔憲人公使は日又一日と天候の吉凶を卜して
 因循見合せ居りしかやうく晴かある易の表も現はれ
 たるを幸ひといふく本便西京丸にて横濱より向け出發
 したり
 天津鐵道會社の告示 天津塘沽間の汽車發着時間は清
 曆七月十五日即ち我去る十一日より現に改定したる告
 示よ由れば不時の風雨にも拘はらず漸次往復を頻繁な
 らしむる趣向に出でしものなり今時間表を左に記し以
 て北部鐵道の振盪を後日に徴せんとす
 天津發 每日二回(午前九時四十分、午後四時四十分)
 軍糧城發 (午前八時三十分、午後五時三十分)
 塘沽發 (午前十一時六分、午後六時六分)
 塘沽發 每日二回(午前五時四十六分、午後十二時四十
 六分)
 六分)
 北塘發 (午前六時十五分、午後一時十五分)
 漢沽發 (午前七時十三分、午後二時十三分)
 董家莊發 (午前八時三十分、午後三時三十分)
 唐坊發 (午前九時三十分、午後四時三十分)
 曹莊發 (午前九時四十分、午後四時四十分)
 唐山發 (午前九時四十分、午後四時四十分)
 唐山發 每日二回(午前五時三十分、午後十二時三十分)
 曹莊發 (午前六時三十分、午後一時三十分)
 唐坊發 (午前七時三十分、午後二時三十分)
 董家莊發 (午前八時三十分、午後三時三十分)
 漢沽發 (午前九時三十分、午後四時三十分)
 北塘發 (午前九時三十分、午後四時三十分)
 塘沽發 每日二回(午前九時四十五分、午後四時四十五
 分)

軍糧城發 (午前八時三十分、午後三時三十分)
 塘沽發 (午前九時三十分、午後四時三十分)
 塘沽發 每日二回(午前九時四十五分、午後四時四十五
 分)
 一重一佛以
 より二佛を